



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で行った講話のようす



慰霊碑の前で手を合わせる山村さん



被爆体験証言者の松原さんが描かれた絵を見せながら話す山村さん



山村さんの講話を熱心に聞く子どもたち

「最初は、研修が3年間あることに最初は驚きましたが、自分が持つ平和への思いを伝え、また原爆を経験された方々の思いを伝承するため、取り組んできました」

研修では、被爆の実相について

「最初は、研修が3年間あることに最初は驚きましたが、自分が持つ平和への思いを伝え、また原爆を経験された方々の思いを伝承するため、取り組んできました」

「8月6日は何の日ですか？」と聞かれて『ハムの日』と答えた若者を見て、心底情けなく思いました。なぜ広島県民が、8月6日を知らないのか、と思いました」

また、山村さんのお父さんが被爆体験をなかなか話されなかったことも、伝承への思いを強くした要因の一つでした。「私の父は、原爆投下から6時間後に広島市に入って、救護活動を行いました。そのときに、駅で目玉が飛び出した状態でうずくまっていた人を見て『可哀相に。亡くなってしまったんだな』と言ったら、その人が『うちはまだ生きとるんよ』と言うのを聞いて、自分の発した言葉を後悔し、もう自分は原爆のことは話さない、と心に決めたそうです。ほかにも、被爆体験のことを語ることでできない方はたくさんおられると思います」

また、山村さんは来年、世界各国を巡るピースボートに参加して、原爆のことを話すと世界の人がどのような反応をするのか、見てみようと思っているそうです。

戦争のむごさを子どもたちに伝えたい

講話を子どもたちにするときは、なんとか気を引きたい、とどうしても考えてしまう山村さん。「講話の合間に原爆に関する歌や自分で作った短歌を入れて、興味を引くよう工夫しています」

そして、山村さんは、地元の子どもたちに伝承講話を行うことを希望しています。「平和に慣れてしまうと、8月6日が何の日か聞かれても『ハムの日』になってしまいます。戦争・被爆の悲惨さと、平和の大切さは、絶対に子どもたちに伝えていかなくてはいけないと思います。戦争のむごさを知って、そのときに人々が感じた痛みを知る大切です」

平和への強い思いを持ち、伝承者として被爆体験を継承した山村さん。「依頼があれば、どこでも行きますよ」と笑顔で言う山村さんは、被爆の記憶の風化が懸念される中、平和への思いを後世に伝えていくため、日々、活動を行っています。



平和への思いを伝承する

7月4日(土)、広島市亀山公民館で行われた平和のつどいで、亀山小・亀山南小1・2年生と児童館指導員約40名を前に、当時13歳で被爆した被爆体験証言者の松原 美代子さんの被爆体験を話す山村さん。

被爆者の高齢化に伴い、被爆の体験を話される方が少なくなってきています。広島市では、原爆の恐ろしさを後世に伝えていくため、被爆体験証言者の体験を受け継ぎ、それを伝える被爆体験伝承者を養成する取組が行われています。

原爆の悲惨さを伝えていくため、今年の4月から講話活動に取り組まれている、安芸高田市唯一の被爆体験伝承者、山村 法恵さん。平和の大切さを訴えるため、活動に取り組む山村さんを追いました。



被爆体験伝承者
山村 法恵さん (64歳・甲田町)

3年間の研修を経て被爆体験伝承者に

被爆体験伝承者として、被爆体験証言者の体験や平和への思いを伝えるため、平和記念資料館などで講話活動を行っている山村法恵さん。山村さんがこの活動を始めたきっかけは、定期的に参加している「がん患者の集い」で、友人に勧められたことだったと言います。

「最初は、研修が3年間あることに最初は驚きましたが、自分が持つ平和への思いを伝え、また原爆を経験された方々の思いを伝承するため、取り組んできました」

研修では、被爆の実相について

平和への強い思い

山村さんは、ご両親が被爆体験をされた被爆2世ということもあり、平和への強い思いを持って活動は続かないと思います」

「多いときには、月に半分程度平和記念資料館に来ることもありました。原稿の作成のことを考えると気が遠くなりましたが、なんとか書きあげることができました。平和を思っただけなら、この活動は続かないと思います」

平和の大切さは、絶対に子どもたちに伝えていかなくてはいけないことだと思います——